



語林類葉

八

盛洲鎌

ホ 2

398

8





語林類葉卷之十五

清水濱臣輯

ふの部

一言

ふ

本支

太平記五

大塔宮 熊野落

己...ハ支山伏...間。今昔

廿五

衣櫃

ハ本

支荷テ出来タリ

某ふ

カヤフ
山城
養生野

拾遺愚草

四十

ふの部

好忠

養生野小

ミノフ
サ、フ
ヤケフ
苔生
血生
圃生
アサ生
枚生

麻ヶ浅ヶ六帖

○後拾遺雜四 うかりるこのふの浦 ○万代雜三

氏 さらふ ○曾丹集 終二月 やげふ ○丈木二春草 光俊や

らふ ○丈木三早蕨 為家、うやふ

川あせんよあけふ此孝祐とほさつらんおれううちお初えんあう

○丈木九尻 長方 圃の尻生乃

丈木ト云 為家

あ川あめ、雪生此稀穂りてされは何ぞ此と西るこつ世花

同十四鶴 冬され浦風吹てうつ

なすくあくあて此乃其ふまこそ山の杉生此雪よあうう

同廿四 安嘉門院四条

○丈木篠 安嘉門院四条 サ、フ ○

某ふ

為忠後百

北口のけ井のとまおまこころうらるるあきい三河のふきふけうらり

同 為 壺

こころあひのあふのむはふてねみちりうる雪は花野

二言

某ふき

後拾秋下 橋網朝臣

こころあひのあふのむはふてねみちりうる雪は花野

林葉四

ああふちを野へのかり度いさうつら母あぬらひの雪のふふき

丈木七 頭昭

あまつ山うの花ふきれうう度やまもあもさえぬ雪のふふし

アミブキ
雪ノ上ブキ
松ブキ
雲の八重
卯の花

宛文 張文 渡文 送文 氏文 急状 廻文 立文 箱文 下文 急文 寄文 漆文 裏文 申文

同世 嗚呼繪ハ筆ツキハ□ニ書ケレ也。同世大ナル筆柄ニ入レテ其ヨリ出サセタル也。○
水鏡 文 武 昔といふは、繪師にあいふといふて、うて、筆洗あやまり、ちいん。源ミとつゝふとろにあけあつみーうき筆

ふと 世ニ不圖とありい

竹取 さきとちやま貝とふとあまうとさきいふれおほふふ。○大和物語 女ふといひらる。○源 初子 あれをかしとふとええり。

某ふ三

宛文 棟鑑ハ ○宛文 盛衰記。張文 棟鑑九 ○渡文 渡由 今昔十六 世七 御前ニメ事ノ由ヲ申テ慥ニ己レ渡ス由ノ渡文ヲ。同 同 渡文ノ文ヲ書テ。盛衰記十泐金子兩富士ノ綿十兩ノ送文ナリ彼送文ヲ後サマニ投捨テ。同 廿七 和君ハ軍ノアルカシ。氏文 読ント思ケルカ 系四 也。○急状 今昔廿五 ○同 廿八 此五人ハ兼テ院ヨリ廻シ文ヲ以テ可參キ由被催タリケレ

三言

ふくろ 封

北山抄 封字の如きりか 近代ハ忽引^レ墨ヲ

林業五 待返事云 ^{むくろ}地多^くい^{ても}こ^はそれ^をい^てあ^らい^せん^とい^ふ

又木文 前氏部々雅有

今昔い^ひみ^く之^一 ^くま^り色^つい^くま^りふ^ふ ^ふれ^うし^うき

○今昔世七 ^{十二} 緋ノ組ヲ以テ上ヲ強ク封結ニシテ

餌袋ヲ
ナリ

ふくろ

新猿樂記 似夏牛^{フクリ}圃^ノ○愚抄六元久元年七月十八

日に修禪寺^ヲめて又頼家入道^をを刺殺^{して}ク

こみ丹元^{より}つ免^さり^し也^も頸^に緒^をつけ^みく

里^を看^ふと^して^殺 ^しく^りと^安え^き○

某ふくろ

万十ハ

も^りふ^くろ^をこ^のい^はま^りぬ^まり^あら^う今^いえ^て ^うか^きる^さい^せん

○提中納言^{より}あ^らち^てら^うけ^た家^を入^て ○源^義家^ハ

ん^か ^のさ^られ^玉の^さ ^をく ^{^あや^うて^その^らか^と}

そ^のい^は ^をこ^れ ^をめ^し ^をさ^き ^ふら^うに^れ

て○盛衰記十九懐ヨリ文袋ヲ取出シ中ナル

ウケ
ハリ
スリ
文
布
扇
の

○

り免

字鏡連字部 低視

邦見逆見也大加
比目又不志目

○源若紫

水うちめをさけうみ打まうりうみめに水屋をう

川うきまうに○同差 水うみまやうを○授衣一上

廿九 ○平家物語終二廿八

○続世継

いりもかまうりうりうりめに水うきうりうりかたに○盛

裏記六十○同同十五 ○今昔廿五十三 无端一也ト云

シカハ卧目ニ成テ和ラ立ニカ○同同世五 ○源初



まのれまひーとをさうーのまふとまう

め舟風りう○同 舟舟 かまうりうい多れまう免なり

散本經信々つらーまみまうりぬとまうてんまうとまう
岸の上とさうれとこれまあちま風く水のうめ舟風れぬ

○

諷誦アシユ

捨遺哀傷 詞書

ふせぶ 伏菴 ○ふせぶの火將物語名

捨遺負外
うちうふふせぶの下流埋火舟善のふやまひあうん

ふくは 二間

讃岐日記 ふくはある磐石と云ひてせて。同 ふくは間

みそあ〜んと伝〜れと 舟筆の文 般巻心 同 舟のついで

にふくはめてあちてなり〜 舟筆の文 般巻心 語をせまいて。

仏間ノヤ
ウニキコエ

ふてる

大和物語 けあありゆか多きりあまを湯ふてつ。テス



ツチ。今ツカへ人ノ生ノ意ニマカセス不奉公スルヲフテ

○ ルトイフモ同語カ
○ ちカスト云モ捨ルニテ同語カホ
カスハチカス保部ニ出タリ

ふるお 舟子

ウ敷保 吹上 舟子うんきりあて〜。

ふの〜 不能

榮花 栄山 東三條の大将のふの〜とを〜〜して
かち人ハ〜あて〜ちやけのき名ハ大事りてまを
〜まぬん。

ふむ六 文管

濱松中納言 ちんのおむ六のそふーおろきぬるを

ふそく 風流

錦倉右大臣集 的弓のまふそくのまふ大井川とつくりて松丹
後のかゝるふとのま六のま。続世継二のまのみのり 百体のみ
あかー一度丹をぬくそあふそくのまあし
たりそやのま同四のま富川風のまこれう衣丹ふそくのまぬと
して女房の車のまりうのま丹をみちのふれいのまきのまてのま同十



志平岩の
うちき うきりうるまぬ風流ぬとほろそこの侍のまきのま袖
中抄十七 をそきて山 風流ぬをそきて山の月をふそくのまる
あひ人ののまつりあるのま 師のま律師

そひぬぬくそやそやぬあーのまをそきて山の月をきのませハ
○師光集 堂のあき乃少助奈の使丹あち侍のまりのま丹
車の風流のまりのま侍のまりのま又の日也あのまりのまこ
父の大納言ぬとぬいのまつのま侍のまりのまこ
色ふきあうらの荒ち里そやむ風のまぬのまとのまほ
○万代秋 一忍文のらん六のゆけのま侍のまりのま風流のまのま存
に恒徳のま ○糸内侍日記上 師前丹おろきのま風流のま

に九十三もとりふふ〜堂々堂々下畧

不耳

東鑑九文治五年正月十九日若君御方結構風流摸丈臣饗儀藤判官邦通為有職營此事。同

嘉禎四年八月十九日今日御吳奈也將軍家於

今出河御見物間渡物風說結構異例云云。

同^{同十}嘉禎四年閏二月三日御儲被尽美御贈

物風流棚各筋金銀置和漢書。同^{四十九}正元十一年三月

廿七日賜風流積帖絹緋絹等於女房之中。同同

四月三日御息所御方進風流造蓬。同^{五十二}文永

三年三月廿日僧正被献風流一脚。同^{三十五}

仁治四年正月五日云云御儲太結構御引出物

及風流云云。尺素往來廳下部皆當色犀鉾

持以金銀風流付于衣裳云云。今昔廿八五此ノ為

盛ノ朝臣ハ極ク細工ノ風流アル物ノ物云ヒ

ニテ人咲ハスル馴者ナル翁ニテ有ケレハ

○同^{同世}風流賊ヲ尽シテ金銀ヲ以テ莊レリ

○

ふり〜 今云フヲ

今昔廿六三 足ヲ離テ綱ノ上ニ踊ケレハフリ〜ト
落ル程ニ遠セケリ。

ふるあは

雲井のこめり 昔か山うけみ年へさる古庄を〜

故郷フルサト

源若菜 いとむう〜を大にせえまひつ〜ちあう

免うちめのこお〜
コレハ兵部々ノワカ
カタヲノタマウサレト

北方ノオハサスナリテナ
レハフルサト、イヘリ

ふるほ〜

いさゝか日記 そ〜ちの交れある ほ〜とを。

五言

ふくつけ子

枕草紙 志まう〜ほらるよ
ふくつけ子ハ又あ〜こら母か〜あ〜い。細流ハナホレ覓也。

ふり〜うん

今俗傳シテヒケウカスト云語原ハオエ
ラカスナルベシ自慢也

保憲女集

ちり〜ん 葉本オ多〜む ひと〜を せやふ〜

○ 続世継 ふ〜の雪の こ〜うい多〜伏見ふ〜うた丹。

同 同 ち〜う〜あおま〜 ぶ〜う〜 ち〜せ〜

りろめ〜也

ふ〜え〜

契云フシマロヒ也 吟云子カヘリ也

後撰

ちり〜も ちり〜も ちり〜も ちり〜も ちり〜も

保憲女集

ちり〜も ちり〜も ちり〜も ちり〜も ちり〜も

ふ〜とふろ 卧所

ちり〜も ちり〜も ちり〜も ちり〜も ちり〜も

簡衆

東鑑世二廿 被_レ加_二前右大臣家 院_普 御_一

ふとあろふ 憶_多

源 初音 ぶとあろふ 引あほ〜ついと〜ん けさ〜

水と弓いあへ里。

ふみまきみ

大鏡ニ此史ふみまきみ母をききていづれくあるおはて
こまおとく母堂てまつるま云。江次房抄五今案件見
参り梳文夾覧上卿云。訟文ヲ竹ナトニハナ
○竹取一人の男ふまきみ母文をまききて。古本今
昔廿七世一ふまきみ母文をまききて目の上は捧て。今
昔廿五九忽ニ各符ヲ書テ文差ニ差テ急状ヲ
具メ。江次房石清水信光奈抄隨見参到来候御

前藏人梳文刺奏覧畢返給。

ふみまきみ

榮光 晚侍星

此宮の侍をまきみ免ふ。

ふりまきみ

降^ア速^キ相^ア寸^ヒ

二条大皇太后実大武集

ふりまきみ^ハ空^ニ雲^間今^ハ切^レて^ハ月^トし^テ免^レれ

ふりまきみ

和名非鼓。棠花月喜 四月十九 ついにあよ殿とへさつつとみぬと

てふあしをあれも。千物名ふりつみ。○統詞 同

支本十八集卷 隆季々
九重の雲は 上よりやうふみの初とみもぬとみつみう南
久安百首

ふるきこせ 古風。イニシへフリトイフ意也

拾玉四五 古風を以て清山ふせき一葛のうもものこえはくも
花鳥井集 懐回 三ヶけさあかふむむふふきれを更ぬやいさうの雲

ふるむあゑ

今昔十九十一 茶 待程ナリ振ヒ音ヲ挙テ。

六言

ふるむせりつる 簡ヲケツルハ解官也

棠花花山 世五 老いもこころをうとハ簡をりつとせぬ。

源須广 ついぬ清ふさりつとまてつさもこをて。

ふりほくそく 佛法僧鳥

性灵集補閑云後夜聞佛法僧鳥詩閑林獨坐草

堂曉三空之声聞一鳥々々有声人有心声心雲水

俱了云云。躬恒集 長テアリ

赤陽集二十八 佛法僧と云くををきうて

拾玉一 後の世もあれしう久き事あれば三川のあかしを了るみおせし

新六三 光俊

○年内侍日記上畧 是うくハハヒえをれやうめう々かし

おろきぬり

こにかく母うこきあう市代ぬきハ三の空のきもぬり

新千教教 貞信公

○丈本集 佛法僧の題あり 新四三 ○ ヒク六ノスサ ○ ヒニ委シ

ふくもぬり

今昔廿七 廿六 牛ノ踏ハタカリテ不動ヲ立テリケ

レハ〇

ふんやう

江次房五 釋奠 注問籍間明經称文屋童明法称

学生算称算乃生〇抄学生名文屋童也

会^{フスミ}衣^{セシ}の宣^シ旨

盛衰記世爰ニ白川法橋幸明ト云僧アリ三塔
第一ノ悪者衾ノ宣旨ヲ蒙テ山門ニハ安堵シ
難クテ當山千僧供ノ料所愛智郡胡桃庄ニ忍
居タリケルカ

不祿^{フソク}ふ^フろ^ロう^ウゝ^ウある

古今長歌 伊勢 おきつ浪あまのこおきつるまねしち八年
てらみいせのあふも船あうゝゝゝちゝゝ〇待良門
院 坂川集さほうえきせおもゝほゝ日やうていともみぬり

てさゝぬみおらまゝとあゝとあゝとをひいて哥集
にさゝおてもいりゝゝと表にて

大連やさも舟流ゝゝゝあふぬんあゝいれ海みゝゝ方はぬ
和泉式部集 ちゝまゝに馬にりゝゝあふ人あふあに
あゝあゝぬ人もぬれあふりあゝゝあゝ舟流ゝゝゝあふあゝあゝ
高文女師集
浅きゝ舟あゝゝゝ海さゝりもさう袖のらゝあゝあゝあゝ

ふ^フま^マか^カき^キき^キの

棠苑 廿一月 暮 みるゝゝゝはきゝゝゝかゝゝゝのみなり

二言

へは かりべに水と俗談にのつゝ。○押付ル意こ

万七 ヲミナシ 姫押と名めきを押をへことと名めき。○枕冊子九

後さいて此あへされてさうしあつにありきこつけ

考ふ。○

へ多

落書露頭序 うけ多所あつとさうととや中へき。○

袖中ニニ日後き多をへ多よりあ。○古今頭注をみ

へ多にへ多とハほくくあきささき多せせてさうり多

ともしゆことり。○

へど

和名歌吐。○竹取あをへとをつささるゆ。○

アヲヘト

へや

空於保 奈使 ろきむく地あさるをあつ免やハ雪をつと

へへへやあつとへあること年きぬ。○へや 誤字

考

へを

和名抄

○松冊子まつしよの巻まきへい五

んとりあまのむすめあまをてつとあまをりり。

へしち

盛衰記十其ヲモ不知花ヤカニ装束シタル者
カモト、リハナチテサハカリノ御前へ厭いと口くち
ニ気色ノ出タリケルト。同三廿八始ヨリへシ
咩メエモ咲ハズ。同六へシ口メ云ハコリト
テ。

へにきり 頼粉四

隆信集物名へにきり
堂いしあまいさきしきりふはへみきりもあまふりうこころうな

へあま

源 朝貞 むしりあまへあまうおまきうれち。○年月
テ心シラヒ、
セサル也。

へんつき 篇 續

松冊子まつしよ 四十 三反 ちりつといてへんきりつ。○棠花 月宴

○ 大まぐろくうぬをへんをろくをいりぬとせききて

五言

〜ぬさほ

ヘラスクテ

ヘラス體

盛衰記五祐茶ハ快モヘラズ。同六 入道ハヘラス體ニテ。同 同 猶ヘラス體ニテ。同 世七 ヘラス體ニモテナシ。○ 著聞圖画おの中にもある。大まおち〜 星おちいいむらまはへりりタラ

七言

可^カの字をよ

四季談 四月 内のちろいつき江の帛一してして空。命と内侍のこもみつ魚伝きも主上はあまをいせ。あまひてはあつういむうあまみおまうて可の字と師及りうそいさせぬん云々

ほの部

一言

ほ 秀

続世継 ミヤミの ほに ミヤミと ミヤミと ミヤミと ミヤミと ミヤミと
おえさ ミヤミ 後 ミヤミ と。

二言

ほく

和名文書具

○ 檜衣二上ほく

くのもう ミヤミ におち ミヤミ らぬ ミヤミ。紫日記 ミヤミ ふ多 ミヤミ 記 ミヤミ ほん ミヤミ 二 ミヤミ ほく

ホシゴ

ほく木

続世継

ほく木のうへあやまらふ

かろく秘
まをうへうきりりまきりかろらんせ

ほく木

穂末

○大いハ寂枝ゆ多と穂末とをめるいり

拾遺愚草上

○被波浮こころうまふみ多れあはれほく木急叫ゆ初書

ほき

リヒカセ也

字鏡

○和名

古今

毛ぬき免えぬ山崎ゆいんあはる人しほくしり

拾遺雜哀

みうけりゆのつまつく青つらあそとあまほくしり

○源

玉うつ 今ちのあししあそてまつひきあえてぬん

○今俗諺ニ子ハ三界ノリヒ
カセトイヘル語也

ほづ

堀百板 俊頼

とかりみほつ、志先かはんせと川さいやぬき風かたむく

丈本三回

為忠後百板改

まろりぬるふたあちあまきさうそ時をうらまぬあちのやいぬい

ほとぎ 正

和名

○榮花ミツハのコウひまきつり免て

ほとぎ母の十六のほほとぎこ。

ほとぐ 正もこくの飾

万四

い免母の母と免人とこれいほとぎとあひりて免とえ

○は方二下級をこきて侍候と法鏡より木居氏ハ保柳も
友ハ保柳も友母て祝チカ神代記うとこへり

○守部保条使 乃つりきりてうとこへり

もきとつりてきりてきり

ほか

盛衰記世一 御門大納言成親々

むまひてふのふきとあひ母繋りてあのはとぎやせん

続古歌 教家

うとぎとあひちけいあを世といつ人のさあぬり

○

ほとろ

方丈記 ころのほとろほつきつらあみとてきてあめ

とら

ほとみ 穂並

新古歌上 去き政大臣

風角の山田乃庵とてり月やほとみとあむすふおあそ

ほろ 法事

拾遺 朱雀院の庚四十九日の法事云々 ○源
笑 乃此法事風と云々

ほむき

万二 秋田之穂 向之全書云々
ホムケ訓 秋田乃穂年伎 ○

ほむら

拾遺 云々 此と云々 此と云々 此と云々

ほろ 未詳

拾遺 策の云々 此紅をある云々

四言

ほろ 報強

○ 廿七日被_レ下細檀二合 各納帖 續 於刀自等

ほとはま

枕草子 八十三 辰末 さまへきとも ぬきとほきほり 出ゆふ

今いりて上衝 けりをもあけり ぬきとほきほり

骨張

東鑑三十八寛元五年六月八日就中光村萬事
有骨張之気。

ほ・祢_レたる 情ヲ強スル也

長明無名抄上人 とんもろいひるふあり

て身を多そんと ほ祢_レもろい ○東鑑世四仁

治二年十一月廿九日 云朝村令難色男乞此箭家

村不可出与之由骨張

ほむらう

水鏡下 けほと八道鏡もいま むむらうありつ
らちつら らちつら。

ほろろ

大和物談に不つとあども捨多めで同説ふ
可考
○

ほろろ

今昔十六廿条 昭戸ノ保々立ヲ捕ヘテ○

本妻

宇都保 春日彦 本妻ともこれ日原也傳りてと

〜ゆ〜

ほろろ

宇都保 春日彦 おとろ殿をせり〜とおと〜て○

堂とひつと母ととるに色ひほろろ〜と候とおつと也大

是之も○二条大成集多ありに色ひほろろ〜と候と

とい多あり〜み〜あり也〜也

みう野母とい多あり〜と候〜と候とあり〜と候

○

五言

法師あり

榮花

玉のまきり

法師ありの時こみみりるに。

星月夜

今昔せ七五

翁和ラ立返テ行クヲ星月夜ニ見遺

ケレハ

我い

うはく山を報りハ星月夜に嬉し

他乃

ふくかふ堂乃星月夜あり

あはえつ

ほそをとよ

紀畧寛弘二年五月九日丙辰紫野御灵會也東
西二京條坊十列細男也。宇佐八幡緑起繪卷
物。榮花若枝 法師會のあそとよのあひ
てうはうらうらうらうらうらうら
春曉田をうちえいほつるほそをとよみと思ひ

ほとりまみ

源

まきりまきりまきりまきりまきりまきり

きりあひのきりあひのきりあひのきりあひの
同 同 きりあひのきりあひのきりあひのきりあひの

とよみつきぬきさらし服とほとろいふみきん
正海をきんもあつはいとわくおわえて
カメノコ
イヘリ

ほろとこうま

雑六 かといやん 光後

○文集新樂府 陰山道 飛龍但印骨 手皮○

ほろとこうま

新六 志やう 光後

山 あつは 正海をきんもあつはいとわくおわえて

同
さうとも こま 正海をきんもあつはいとわくおわえて

○伊勢物語 知頭 披きくちわを つ ちわを つ ちわを つ

ほろとこうま

盛衰記 世四 裁着 夕リケル 薄墨 深ノ衣ノ脛高
ナルヲ 脱テ 打懸 夕リ 三位 是ヲ 空ニ 著テ 頰冠
シ 給 夕リケレハ 衣短ウメ 腰マハリヲ 過ズ○
太平記 世三 共 一度ニ サツト 馬ヨリ 方リ 亦、
カフリハ ツシ 笠ヌキ カウヘ 地ニ ツケテ ワ 畏

たりケル。

ほうけて ほうくくきん

源 鈴虫 うそくはほうくをあませつる名香みちをら

きくほうくげくあき白りきん。

蜜

六言

ほいの不

源 花叢里

うそほい乃不ハ。

法親王

続世継

仁和寺の子

仁和寺に先行法親王とききあえり

いーハ白河の院決之におまは中畧白河院内親王

とつふともあまを法親王もあとりほうくんと

をくめて法師の後親王とききあひくかくて後

きつさつりあも出家の後親王とききあひく

星ノ御門 何帝ヲ申シカ可考

盛衰記ニ近ク吾朝ヲ尋レハ星御門ノ臣下ニ

日唯季通ハ三公ニ昇ラント山王ニ祈申シ

カハ神ニ被罰亡ニキトイヘリ。

ほそきんち

○ 袂衣下十九 ねんきんちれうけめそくおせんち

○

ほふいのま

五代雜三 花のさうみ修心遍 照うとくにをりり

静観僧云

年七拾そいあふれいひそ花の山花の多治をぬくまのあへ

○

ほとけのあに

新訓 陽成院所願 言其尊儀則娑婆世界十善之王

宝算又釋迦如来一年之元。文粹 十四

永久四年百首 老人仲実 釈迦城乃きおとよふ世よほとけのあにいうそなりらん

○大智度論六十九般若波羅密畢竟空是三世

十方諸佛之母

千教教 隆信朝臣

隆信集下教

是作のむねとこころとけりていふそほとけの母とこそいけ

○

ほとけの多祿 佛種

五代百 永信

身乃らうち子仏の多祿ハ多々をそりぬくわまをそりぬるる

同同 選子内親王

新和歌 深親

弟木すて仏の多祿とすつまそはぶれん 正七毎のし

近一 明子

多れなれ仏の多祿をそりぬるるのみぬるるもぬるるやハ

続後拾歌 選子内親王

かくもろろんのみぬぬるるもぬのき祿をそりぬるる

○

ほとけ食ふ

今昔七八三 撥粟ヲ大ト、食フ次ニ。

ほとけ〜しき

危殆ノ意也。巴壅〜しきの物讀めておのき、
もすてりつち〜しちと〜。○音便ニテ大トニド云

万七 みぬきとるみこ乃視ういさ〜ねむ〜多き〜すり

ほと〜〜〜にてをの〜もぬ。○二佐日記さけとぬ

志入 志をさみ志をさ〜ほと〜〜〜ちちちつへ〜

○松冊子十廿ハ 拾送意四 ほと〜えのうらゆ〜ゆつ〜を

拾送意四 人三

何れも〜人〜山のちのちのち〜〜〜成みなるが

同難 茂

まつ〜む〜れき〜のまむのふとち〜〜〜ある回〜ぬが

六帖 ふどの山ふりききるをのえのわたりしははらふほき

○

骨をかり 茶毗ノ後骨ヲ捨ヒテ頸ニカクルレシ

榮苑きうの あうつきあハ敵 骨うけさせりいし

本もとにくりくりくを多いで○

ほくとらふ

榮苑五十八 月眞 ほくとらふふや○宇ノ故保 養兵 上下ふ

とらふふとらふふ○同同 一いいい ニカとらふふとらふ

ふ○盛衰記十二左モ右モ御計ニ隨ヒ奉ヘシト
テホクリ咲テ出ラレヌ○

ほやめゆき

神中十九 ○穂屋トハ諏訪明神ノ御射山サ奈ニ
トイヘリ今ハ縣郡長官長五官領家等ノ造ル假屋ナリ
穂屋ノ地名アリ

ほそう松の井

六帖井

伊勢集

むさしゆありう松のわだ底をあききとらふを何れあふん
以てかとらふわだありう松の井とらふとらふとらふとらふ

故本意下久意

浅うはくはくをほの免せほろろ後の井のつちを身を

千釈教 世をくすくすのわらあるをれをくすくすのちうの

山家上 風をくすくすのわらあるをれをくすくすのちうの

之本世二野 後九条内大臣

新六山の井 信実

○都土産ほろろ後の井さうかこ見えろろ

○後頼口傳 由那々井のほろろ後まわろろ

免みつろろまそあれつろろ

七言

ほろろをいさろろ

詞花 能宣 年をくすくす星をいさろろ黒髪の人をくすくす

○拾遺 忍草中 六方 ○

ほろけのつろろ 草花名

經信卿母集 ほろけのつろろつろろ

百和香 あけむろろ人

花の咲けくすろろつろろ是や依のつろろ

○即俗ニ云 佛ノ座也 ○小野蘭山 莖造小贖云元宝草

甘○ホトケ ノツレ 木艸從親云一一辛寒補陰治吐血

血生紅浙田膝間一莖直上葉對節生如元
室向上或三四層或五六層。

ほの字の里の字 堀川院ヲ申ス

讚岐日記 ほの——里——の——事——ひ——ひ——ぬ——り
と後らういぬ河院の法事とをくらひきせんと
あつととまら——て 鳥羽院に歳
の時めると

十二言

法師の子ハ法師をまき

大和物鏡法師の子ハ法師をまきとてあまの法師
にゆてり。○披桑畧記遍昭う子の法師素姓由
姓二人雲林院に有る。——と云々。

法師の——きおぬい

葉花かやく後一子日此法とをまきほ——とぬ
うき法おぬいおハ——まら。

語林類葉卷之十六

清水濱臣輯

未行
まの部

二言

ま
—
汝

万二十六 吾妹兒尔戀尔不有者秋等之咲而散去
 流花尔有猿尾○万十一世二申○同_{三世}申○同
 六世同○同_{七世}同○同_{十一世}同○同_{十二世}同○
 同_{八世}同_{十世}同○同_一同_廿同○同_二同_廿同○同_十同_四
 同○同_{十四}同_{十七}麻之毛安礼母○字於保_三け

おゝハ元来〜。〇

海〜申

榮花^月一 ぶげう〜考にはは〜まよ〇同^{十四}

男女ハ多々 觀 考の氣生 化交の氣あ〜

ろとそま〜只いりる〇同^九 考をしいのろおきつれハ

とす〜あり〇同^一 考 おぬ〜之のまれおあんありよ

人〜に只いりる〇同^{十一} 考 別いとおきり〜

下〇同^二 兵乱 似と〜 似いす〜 つろいび〜のまよ

是〇字 部保 考使 今ハ受えおひす〜

海〜 核〇マシタハ核ノ梵語

万二十妹之家毛 繼而見 麻呂 平山 跡有大嶋嶺

尔家 母有 猿尾 〇ハ雲御抄

紫集^{上畧} 行遠 考人の考多々 考多々

坂^{後百核} 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

セマシニ核
ヲヨセタリ 〇

海〜 俗言之トトとの〜

新六^{信実} 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

山家集下

山の葉に月すむす〜と云〜も〜めさ〜人の言も解るとみ〜

清暉尚齒今記清暉

教苑の後の葉ともす〜れ〜又〜も〜さ〜さ〜う〜

檢遠復外

多れあ〜人い〜う〜つ〜もあ〜と〜解〜秋の〜

同下

長〜も〜い〜さ〜ま〜秋の〜あ〜つ〜さ〜舟の〜

格五三

今い〜れ〜お〜葉〜通〜手〜月〜さ〜ふ〜お〜む〜す〜と〜思〜ひ〜

詞苑雜下 行尋

け〜世〜ゆ〜い〜ゆ〜も〜みる〜ま〜梅の花ちり〜解〜ん〜と〜さ〜ら〜

○粟花 月真 四十五

り〜舟〜あ〜ん〜の〜中〜あ〜も〜あ〜多〜あ〜さ〜あ〜ん〜や〜

り〜ん〜○竹取 え〜お〜い〜〜さ〜は〜は〜と〜す〜

○

海々 真麻

是本七 公朝

さ〜う〜は〜ま〜に〜あ〜ま〜の〜あ〜ゆ〜り〜さ〜う〜き〜て〜り〜あ〜あ〜解〜の〜山〜う〜

○

海々 左太

山家下 賀茂

み〜多〜り〜し〜に〜あ〜ま〜は〜は〜さ〜さ〜と〜あ〜人のあま〜は〜け〜

海々 真 真カ

雲井の〜は〜ま〜 同六りり〜あ〜大との清借を〜

は〜ほ〜の〜い〜清〜精〜通〜う〜そ〜ま〜〜り〜あ〜ま〜〜り〜て〜さ〜あ〜の〜

あ〜あ〜も〜ま〜を〜傳〜○字 題 係 中 上 中 あ〜な〜い〜と〜あ〜て〜い〜を

鳥 川 海

マナハシ
マナイタ
マナハシ

○盛衰記 十三 二治承四年正月 中畧 廿日春宮

ノ御袴着 御マナ始 安徳帝也 御年三 ○今昔廿八世魚

箸 荆リ ○同廿六ハ魚箸 刀ヲ取テ ○元煇集

兵部卿の親王の御免ていじりぬりり日

そのの海 あり船子湯子人ふりふりやふと袴をすりのにぬりぬり

○丈木廿三 兵部卿親王家 召魚味之咬哥 長茶 長師

○契沖云初召魚味之咬哥僧不可詠元煇集可

從 ○

はな真字

栄花 さゆくのさうい ちぬといとさくうさふれを ○

花冊子 四十 三段 是うまゑ志ううあみまゑううさゆん

あみうきあみんもえううちとさひ ちまは福あめ

○

海茶集

万七 マナゴ 憂子地 ○ 催馬樂 我門 ちやえのちあう北大

領のちやむすめとりおとむすえとて ○ ちち原

君承 ぶお乃ちけのちぬむすめ ○ 同 あみん ちやう

ちけうきうとちあこさとのちいー ○

一子
一子
一子

○源 女 雲井丁の夕音にのびし 初母あつてもさうそハ

あゝ免とのま 是ハ十四 ○同 玉うつ ハカリ ちんハあつておも

おろそけ 此哉の娘ノ母 ニイフ 初

後拾遺四 さうみ

あやうしとみ あやうしとまの ちんハあつておも

○金葉 意下 此等ハ以テ人志 みんまはあはれのつま

青つら 君とてあつて ちんハあつておも

み みんまはあはれのつま ちんハあつておも

トアルヲ此シカ

金葉 意下

つ 此れあはれのつま ちんハあつておも

○古事記 應神加志能布云 麻呂賀 知 日本紀 同 吾力

尊 ム天皇ト云心 ○
国 拙カ天皇ヲ申詞也

三言

はきさ

竹取 うろたぬそ ちんハあつておも

金雜上 補弘

王 王の ちんハあつておも

○

まげさ

後衣 ニ上 五十 六 うみきぬ 乃うみきぬ ちんハあつておも

まぶー目

源 松本 多けきうやうふあふーつてくまーて

あろね

万十二世四 己きもさうあをせあうー美枕きりの丸後音銀さけぬ

○万九 長分 ちもとくい丸こ口子 麻をいさても○同六長

多返くさうに初もとの末呂宿を長連ハ○源 茶屋 加

るさしき松まろ後舟ゆいあまぬん代もさうーく○今

昔廿五 十二 装束モ不鮮テ丸窟ニテ有ケレハ

拾意三 復多の志けふあさあさあろさすけあろさすろ松をいさへぬん

同意四 三 人あひ

旅人のあうおほいつくさああろやい人とあひさるー

千意二 俊成 思ひさ座志ちれさーささうたつめてささお解さろ松せん

あろや 全屋

松冊子 あろや

拾意四 旅人のあうおほいつくさああろやい人とあひさるー

海よりぬく

春の初縁に 海よりぬくを 人のまはらうとあはれしや
まがさくし 後人しむ。

海き馬 牧馬

保憲女集

みづねつ 意成るをさるまき馬のみ ねくおはれみあはれ
○

海き馬の 巻物

拾玉異本 らの〜〜〜さ〜〜〜あ〜巻物の下段あり

猶秋の花をん。思ひ秘物説上 人々あつまつて
あやら〜んとおきまのえぬり

はくろで

六帖五紅

いづゆて 意成かくきんらまなひの やれの衣あつてまに〜
後拾秋上 良暹法師 神つれもあまわれり秋のいまうまそゆ〜りり

○袋草紙ウニガ 云住吉神主国基良暹カ哥ッ

難シテ云マクリテト云詞ヤハアル良暹云
や〜ほ乃衣あつてあて 如何国基云僻事也
紅ニハマクリテト云アリ支ヲ書誤也良暹摺按

フリテ
マクリテ

又云風我の峯をうかり残のをれきそれあききぬ
里多州の多ト侍多ハ是モマクリテヲ誤歎ト云国基

閑口

林葉ニ

おほあききの敷カ夕風斐那のまうまみとそみゆつ

拾玉四世七才

同同ハ

坂百不舎忘 匡房

はくしそ袖も意のかくれぬは候のいろは志ふきおりり

坂百つ

ふまぬのふりまのきんはつしつし方袖しあやまきつ

丈夫六

紅のやりのそれ岩つしあやまのそれまうそは凡そ

讀岐集

以のそちそそそん岩つしひもちもあふりあみて

○

ゆけりき 輸物

カチワサ

マケワサ

三代実録仁和元年十月廿三日申戌 天皇御紫

震殿右近衛右衛門右兵衛三府并右馬寮献物

是去五月六日武徳殿競走馬之輸物○拾

遺雜秋夫禄四年五月廿一日 圓融院のみこ

一不宮に海きあてらんふきまうふりあけ己さそ七

月七のあふ云○同 右大内源光の宮中茶裁合しゆり

あけりきとらと橋のまけをみうしゆりき

○頭昭拾遺枕注勝負ノ丁ニハ勝ワサ負ワサ

トテスル也

後拾遺傳

トテスル也

○頁方カモウノ中ハクハ

○

海客のち

〜の波のま〜此邊の砂多也母老〜多相志秘をある能れ

海客のち

源法合

〜の波のま〜此邊の砂多也母老〜多相志秘をある能れ

あ〜成〜く〜ふ〜の〜り〜へ〜う〜ま〜ち〜
竹取やう〜し〜か〜ち〜人〜と〜の〜ゆ〜り〜の〜ゆ〜り〜
鏡一三条 海客のちを中ニ書ク事多ク有ル

ま〜の〜ち

田史ニヨミナセニハ後世也

全雜上田家老翁

海客のちを山田乃庵本句みり〜いまり〜秋みあるんとはる心
千載

海客のち 町口

大鏡一花山 其家ハ土御門ぢち〜ちの事也是道道なり

りり ○

海ちどき

后拾春上 篇卷

花えりうと家路おとく海ちどきとすくも妹やいん

○

海ちとほ 待遠

後撰

○ 枕冊子十廿八

待遠みろくく云

海りうき

都土産 木の蔭葉集りて侍りぬみま

うきと 雲をいよくと

同 末の香山ちりうきいよくと又やあま

○ 同返 海ちとほ 袖をいよくと末の香山ちりうきの多の福に

海りうき 間使

万

壬二申 廿六

雲よりおとる 是いよくと雲いよくとあまの雲に

ふーめて

五言

はるりけり

はるりと助辞にッ

千神をけりち福にまうりけりりる○拾遺衣傷

中筋言敷太まうりかききて後云○同同右道佐のふり

多まうりかきまみりるみ

はるりけり 松上

金葉雜上 松ふみちるぬ人のあちて○保憲女集

あつりみみおとろきをさうと人おい多りけり○

同下松うみみ僧のきてさうけり分○松冊子井原松上

のうりみ 中畧 松上けりるを○

はるりけり 松箱

拾遺雜賀 成房朝臣法師ハミ松葉とるふつ

とるりけりりるさう○

はちあー五 所足駄

拾玉四 みれいさつさーさい 道六所足詰をりたのあつさる

ほちりくぬ

拾玉 町らぬくろりいひてこをみまもおのてりり皆志くれり

○

ほりりもの 食物

源 玉ころり ほりり物多へしききつろりて 〇榮亮
それほりりものは厨子不ぶにまへし

まおとぬく

マユノアト
眉墨
眉造

海人藻云彼御取鳥羽 己前ハ男眉の毛をぬき、鬚
をまきみ金とつろり一切を及未代毎度矯飾
の、まこ〇取之毛物於ほりぬき、後つけぬをんあび
させぬき、ま コレハ女ニ
イヘルナリ 〇忠い秘上まの跡もぬく
後みあし コレハ古シ を〇東鑑四十九十八 御眉
墨 御眉造 〇松冊子 おのあてまをせ
うほれくまの ほりぬく
コレモ 女ニ
イヘルナリ 〇

ほりり

圖頭 〇 法師ヲ云

海よりおはげ

拾遺三 其物のおはげなるやあるやあらまはげまらるゝある秘かにとてかめん

曾丹集

あろおはげなるあまの物のうへ玉とやまそくおける白雲

○小所集 長 海よりおはげなるをまらるゝ○松冊子 草

海よりおはげ

靖珍日記

おはげなる君をみるや海よりおはげなるみるらんつけぬとてかめん

○

六言

海よりけの君

儲君

宇都保よりけ其國の帝后おはげの君は憂を一つ

なむ○源 桐壺 右大臣の女御の御をくもるゝこひれ

きおはげ乃君とせよとてか一つを○小侍從正月七日

申之成侍りへ君を慕ふとせよとてか一つをけの君

いとよ中せとくありゝい○

海よりほろむ

食物。ムサノウ、メダセムサホルヲマ出ルト云ナリ

宇都保より君 海よりほろむ月日多ち花むとり。土佐

日記 本やや故ありんきとややうらん。

由加~~~~~ 様

栄元 十月 十六

由川のうてれ 松臺

五代秋上 左兵衛督 定綱
蟬の聲を しのぐに せせせせ せせせせ せせせせ

由川のうてれ

壬二集下 松臺
むねのうてれ しのぐに せせせせ せせせせ せせせせ

同着山志

志あるまのりの煙は夕暮かおとをれうてそ 夕暮の本松

○続詞花賀 阿波国司彼四ノ墨銘に山下松煙と

以銘をつつとて 夕暮の良暹法師

君う代みあてしと世色ハ山志を代りの煙をいつり多由へそ

○八雲脚掛異名部

○続詞花 人のせしと志ありりて返りのみ扱きりり

のついでみあてて書てやまてりれいおて返して松の煙は

走の知れりるを以てりりて返りて 玄龍聖人

世の之れ紅染くもえきりりて返りて かけの煙は

○著聞三後白河院態野語に夕代の高きつり

かゝり漢しうり多に圓司松燦をうては茶にお
手堂りり中畧 け曇れう初と花あそ

海川のちほり 松氷
榮花つなきまき
子代隆きまりの 出ハ妻られとうちとけかきおとる

海川の葉風
統詞花旅 後取
佐吉の志まの けに 孫齋て 木の葉風まきと ちあつる
散木

六百番 顯昭

海川のちほり

白氏集 五架三間新草堂石階松柱竹編墻
今我松乃ちこれ杉の房よとりてきこのをまけうきし袖

海川むきとの 未詳

中勢内侍日記廿六 ちりむきとのみもをあし引あけ
て〇同廿七 け

七言

あけがましむ

原 まろ まけがましむのまはらけは。同 あけがましむ
まけがましむのまはらけは。

あけがましむ

散木七意上

マ、キクル

萬石後百 親隆
あけがましむのまはらけは。同 あけがましむ

あけがましむ

万代云一山家云

山里のまはらけは。同 あけがましむ

山風にあけがましむのまはらけは。同 あけがましむ

あけがましむ

あけがましむ
船樂

體源抄云 冬 音声 樂春 春 樂夏 應天 樂秋 万歳
樂冬 万秋 樂賀王恩 太上天皇 御賀用之 最涼州
内宴用之 淡河島 同上 臣下 御賀 万秋 樂島 向樂
再 太平 樂 雲高麗 顏 席 退出 音色 長 菱子

暉還城樂、行幸還御之用之夜半樂兼和御用 宗明樂
御願供養上 高坐用之 海清樂南池院船樂奏之 越天樂 急高麗新
蘇利古放生會御典 常武樂前同 中務内侍日記
廿日夜半終日手つらういあう法ふれかくあ。○
榮苑くの舟りかくきくまほくろきむくおもくろく。

萬葉のあひ系 真青新糸又マワホノ紛カ

五代社上 仰光 柳機ハ海老のあひ系川けくくろきときえぬ星舎の空

十一言

雲の木よ杖をうつせ

春深三才のせみはうてしちみと海りあふ家ゆ雲
の木につる成つるをさうしをこて
老みろ我子ハ眼み、知らす一雲の糸と藤杖ハつぎルリ

みの部

二言

みふ 御封

榮花

元もてぬ後

○源 女

侍多しちり此つさかり

○御給年宮年爵

三言

みぶ免 見醒

庭の草しんいふみやみきあせぬやういさふくをぬ○源初
赤れさくむ人いんきあしぬくき侍有き後と○

みよぶ 水

秋多んに此の風を以てしてみよぶは志の田子の衣の
いさげ多きあゝのあふ多し麻須香井衣みよぶつゝも

みよぶつゝ

みよは 御修法

七壇の
長日の
五壇の

栄花月真七壇の御修法長日の御修法○紫日記五
壇の御修法○栄花長日○源氏

みり 御厨子○下ノ女房ナリ

松冊子十廿七 其の次ハ姉母の御車にあらを○
同十廿八 みりつゝいとあつて○

みよの

日記ニふち多し其の免のさく免形もあつて

みよや 御厨

栄花月真 其の次ハ姉母の御車にあらを○同十廿八 みよや此
馬路名取の源女むういみまやと世にれき上

るともと。小馬命婦集。こまの志。へまらきへ
のそのおほく。その中に多て。あられの。まらきやこ
○同。こまやれ。まらきや。いあうて。まらき。て

みその 見物

裳花月宴 免つ。うれ。り。見。その。○

四言

みくほり 水分ミツバの 水配

古事記云次天之水分神次国之水命神 訓分云
ク麻理

みくほり
みくほり

みくほり

万七

うみさうま、いそね、うき、み、ぬの、水命山とみまをうれ

田点ミツワケトアルハ誤也

ワレヨウ後人アヤマレリ ○枕冊子

○王籠十二詳説

六帖

月詣ニ 経盛

夕霞、あうけ、山、み、り、れ、い、ぬ、の、水、命、山、と、み、ま、を、う、れ

後撰、意、四、故、本

池、あ、れ、い、い、あ、う、の、か、り、れ、い、み、ま、を、う、れ

六帖同

千原一 基後

み、ま、を、う、れ、い、い、あ、う、の、か、り、れ、い、み、ま、を、う、れ

振百彦 歌仲

み、ま、を、う、れ、い、い、あ、う、の、か、り、れ、い、み、ま、を、う、れ

○

みきえこ

散木冬

あけみきえこ 佳しう 女あり

雪とまきとさいふもこの枝 影もさかす

○

みちつこ

都のつと 道つきの宿り

みちつこ 道橋

隆信集下 その河井のつと 橋とさき 宿りと 宿り
うれあり

かう川のおつとれ 橋を渡して りると 宿り
は通し 女とさき 宿り 宿り 宿り 宿り 宿り
さやと 宿り
け 宿り 宿り 宿り 宿り 宿り 宿り 宿り 宿り

○

みきえこ 水傳

六帖六つ

その 水傳のつと

みづつき、耳附○心ツキニオホユルト云ヘキニ同シ

狭衣一下十八 けめれといひみつきにおほえりれど○

みづつき

拾玉一世二

以ほりたる山きつれみつきといひききたる後の春風

○和名

みづつき

住し物語さきへきさ海とるよ耳とるよみそ

五言

みあまのうら

順集加茂の祭申の日みあまのうらとて

あまのうらみあまのうらつけていのかことれはまもまのうら

まはせ七曾丹集四月中

長秋詠草下

神代

五代神祇

○河海根加茂祭前日於垂迹右上有神事号御

形御阿礼ハ御生也○花鳥之あまハ玉依姫の

別雷とくはひハ雨を以ふにやせて御生と

書則うまちをあしとるる有み形とも

書り。○保憲女集文 てる日ちもこあれとて

引。○枕冊子九十六段中みあき のせんし みあれはせん

云 人名也此人今昔ニモ見エ
タリ新古今雜上ノ作者也

山家集下
思ふ王みあれの志をよひくはるのれまはるもれりしとて

丈本七

○みあき山

万代神祇若水
四季談四月

○拾芥下未 御阿礼限

賀茂一社。○新古神祇 みあきになりて

拾玉異本

年々へみあきあはれのみあきまうけてそ其の志を

室治百首首 賀

りしやみあれのつぎはしめとて神のやろも衣入せ

丈本七

丈本七 行家

みあれしときハ来にりりりかちつゝの山みあひと

六帖二こじん志 以

あきむき引つきてとて女子振か茂の海波きち海り

○丈本七 みあれむ下 同

丈本八 玄海

時鳥みあきの志をみ引たをみ印みけうきぬを仲と

源道脩集 三あれむ不

夕々けくか茂のうりにこてにりあや人のおわも

鳥衣百首 鳥業

まありあはをううて神山のあれの志を我むし

丈本世三 公朝

こてにみもつてみあれ日のあひうけ多る

○

みうき山

八雲みよきの山 大中女将畧名 ○後撰雜一云兼輔朝臣

宰相中將をり中納言に改て又の年のまらぬ之を

あちのあまにに改て是うきひのあつて

兼輔朝臣

あまのあまの山に遠れとちあはむうれうれ

○頭注密勤 いりく世中の傍りの集云三笠山を近侍と

いりく古事談哥枕子 も万葉古今うも本文に

いりくやと此系 いりくをとりておれくや事に

○拾遺雜賀 ○月詣九雜下 ○後撰雜二 和泉式部

○続古賀 後多羽院下野 ○後撰意三女将 実忠

うらひ作りりり あまにつきて

春日の使女 あまにつきて

あまのあまの山を あまにつきて

みうを

拾遺意 あまのあまの山を あまにつきて

○掃部式 下世二 御川水神春秋祭料

みよき 御輿長

山家下放生舎

○ みまゝのたぐさうまゝをわづらひてあゝ神のまへ

みまやとら 田室守

後拾遺

○ みまやとらうらふまゝをわづらひてあゝ神のまへ

家集同

士二集中女六

時鳥鳴やまのまゝをわづらひてあゝ神のまへ

みちの人 其道への人とてあゝ

○ さきの秘さめ 哥の判とりてあゝ神のまへ

事になまきり。

みみのうら 火災

○ 天武記上十才 日々夜々 アツナカシ 失火 アツナカシ 處多 オヤケ ○ 同下 アツナカシ 失火

○ 玉うつ後十一廿二 安元三年四月廿八日の火災に

みみのうら 三途

源 ねん あやうきまの道にえゝん一時に。河海經云

果報若書還墮三途。地獄餓鬼畜生 花鳥 ○

みねしるし

新編 隠倫
おちつちのちかちかよみねの何れに人ありとぞしん

みまきり

つくは問答席いそめく耳かきち侍りしと

みめのと

統制元下 和泉式部
福さめす月を吹くは風の音とむくみめのとをいし

みまきり

紫集やまひの一日うまに出来るかありし車に法
師のうみをうりてせまををぬみて

まことの神のたまはるにこそありみまきり

○源まきり

○同 檜苗 みまきり

そくつらうひて○守教保 藏院 女御のそよみあり

なつてまきりあをにけい白き法衣を多てまつりて

みまきりしてあまいおを

みやえり

中勢内侍日記　うけりし書つて　みやえりし書れり
○丈木廿三　光俊　ぬほのよめ　左注　世方の席元々年
十一月五日鹿嶋社詣て改ま免々しゆるに

六言

みやかきみ　所燈文

源　玉うゝ　みやかきみ　文帳と書しるる人なれり　○　花鳥季
部王記延長八年八月作願文遙祈長谷寺観音

願脚病平愈將造白檀観音像及奉鏡一面灯
明十灯

みやえり　と　御厨人。女宮ノ賤ニキ也

延喜式

○兼晡集　是ハ心てり

みやえり　と　みやえり　○源　復　みやえり　と　延
十三　段　みやえり　と　みやえり　と　みやえり　と　みやえり　と
みやえり　と　みやえり　と　みやえり　と　みやえり　と　○

みくらーまはー

宇治保 養系君 七月七うまゆめ 賀茂川舟はらーまはし
に大気さうまーめまう○まのむね止 みくらーまはー
つまを心とまらさふまーまてとみみりやうねらう
くちあひうーま

みさーまはさ 柳庄柳牧

源 貞テ○同 彦虫 ○大和物終 志と國々の柳庄柳と
におろせまめとめめえう○

みーれめいろ 三品色 ○藤こ

隆信集下四十九
かさーあー花の白いみま多まかこーれのとまのほまー
○

みちあきふり

○都土産 ちよ送ちふりにままーまもねんあまやうみ結ーま○小
嶋口号ちよ送ち急ーままー道りふりめてままぬ○

みねしちま

イツマテ草ト同物カ伊弉丁考合

壬二集上

多岐のいとく家位宿のうへにあつちみねしちまも名まじつは

○

みのけとの馬

さかの物鏡序馬ハ廿二一唐国より後里一付耳のけと

のとついで云

みとの志る一 即渡心

五代秋上 中原師光

思月母と志る一もあしなむてやましんはせぬといふ今も松

七言

みうちきれん

源 紅葉賀

うへみうちきの人名して○松冊子 日の心

る程におきさせういて山井の大納言名し以きてみ

うちきまうせういてうきまうし様のほあほしあ紅の

ほその夕をえぬももうさくぬはとく名川

みとの懐くたれい

五代亥三 顕季

いとうをうりみとのおくそい葉あうておやのいさあみさうさう

みのしうちう

後撰春上

万代雜五

別てハ

保憲女集

紅葉まのふくしを山丹まうらひてみのしうちう依カきつ

袋中子

別てハ涙の雨にまけまをのしうちう衣ほまひぬもれ

見ハ前大相回侍中某ト云者大亡之後并

僧ノ差ニ異体ノスカタニモエケレハ

山里の紅葉のまはるるんまのしうちうまをぬもれ

新十

みのつねゆめ 病

隆信集

〇 思ふやのつねゆめも夜宿ぬいとくまきりまの雪うた

みやまのいぬ

都ノタツミ

拾玉五 我意ハみやまのいぬを伝ゆらき無のさとと只ひたせとも

都ノミナミ

秋六 ちと 夜立 ちとるのぬらみやまのいぬを伝ぬハ大内山のふもとぬらり

支本乾

同 寂蓮

丈木六 録倉右大臣

○ みま 猶あはるるるあはの江のそくはまの梅のゆふ

十二言

みまちあはるるるのちうい

拾玉四 親音品以種々形遊諸国王
三十あありまのちういの梅しきハハあはるるるるるる

むの部

二言

むく 粽

異本拾玉禁中

○ あまをえん人らとみうくきおほをれむくのあ

むけ

花冊子二十

ちうへそとあつあつの神けくむけまをあつとさうまや
拾遺物名
こまをれに一人のけくまをいりきうむけかあしとさうまや

○ 僻業拙むけと云 詞ふにまを初と隠題のあはみま

しき事とあるは只の奇也とむへん。大和物語
むけみさうり道一奉らんやとてえつてさうふ。

むお 無期河

源 柏木 係ハむおむえと多くすうりしをさし以ては
而~~~~しをさしむれと至と只さうえ。同解
むおみ婦しきり。大和物語 以て久しうりれを
むおみ侍多てとらう。讃岐日記 侍し~~~~あ
むおみ成ぬ。今昔廿七十九

むね 宗

山家下

家の風むねとゆへき本のもよひ今ち里風んと只よとのを
同 神皇正統記とあるれとあつやのむねを月むねとす

む 某

一一ス、キ
一一キク
一一ハキ

同 後拾遺一

一一 萩 堀百萩 師萩 ○ 葉花 玉の村 ○

流杉葉の世近又つきせはさうて白へり葉のむし菊
○ 同 萩 村菊とありあるふあへありもれう葉のむし
とてむ。○ 同一本葉むし葉花のありはうつらひむ

むとく

松冊子 むとくぬあ

すまひのすけくむるくろて○源女

むとくぬけおさきある秋○同梅枝 いつまことむと

くあしはさあめあふとんきくさき判若ぬめくと

まといふ○河無徳○源井川 夢人むとくぬけあふ

める末に集めて○同蓬生 才門ぬすめてくぬけ成

て入々すぬつけてむとくぬ多也○細 西あき

もぬきとく○シカタノナヒツマウ又ト譯 ○原常夏あめとむ

と成りぬありういしきうれ○櫛ぬ引 むとく成うけ

とむいしき本もをさちせきせるとあつてぬ○松冊子

いとわい 遠きあうきすう人かつきく縁多の多て文はんと

きぬちあ 知るる人のかりあほさうぬ書くやうさうぬ

ぬあいつさうぬとをさうあちく返すぬさきくむと

くぬいぬくさる○

むやい

坂百志 佐和

むやいすうう海のとぬまのきそさうさあおれよぬぬも別きあ

林葉一 荒あふぬさぬさぬむやいすあいうせとて入望ふりふう南

山京下 三ぬ川とすぬ雪ふくさぬぬむやいすあそとをありりり

○

むら 村濃

後拾秋下 燈のち方後
ふらにらふ物にせう大の川むらあめえあふ流のふ系

四言

むら

古今

○難太平記下 只斤腹痛キ昔心ニテ

昔老乃去み物にみとくふのふれ

ムカシ心
ムカシホヒ
ムカシメリ
ムカシヤウ
ムカシビ

○愚管抄五木の人の昔人の人かたをとして殿意にうけ
てけりらまを○今昔十九条^{十七} 御筆を手に扣ニ遊ハシ
ケル程ニ此ク人々ノ参りたりケレハ昔メキテ表
ニナニ 岳サレケル○源^{蓬生} 侍帳ともいふ古
代^み 形もてむら^や ありまを^い ありまもあれハ
○君の徳とまを^い ありまの^い ありまもあれハ
昔^世 様○

むらむ火

河 向燒 日本 紀 ○源 味川 ころりつき

むらむ火 つきつきを○花虫のつきつきありあり

つぎをむすべし必消多を向火と云ふその如く人の
 腹と云ふをくろふ又腹をくろふは人の腹にそ
 やせ成る。夏後抄七是と云ふは。あまのむす
 え火と云ふは。朝夜をくろふ。あまのむす
 〇

むす湯

宇都保 あまのむす湯のまふ借入 活むす湯 内侍のむす湯の
 おとく あまのむす湯のまふ借入 〇源上 東文の室
 昔なるふいのむす湯つゝあまのむす湯のむす湯
 〇花延長四年

六月一日皇后産長児 村上天皇 内侍奉仕御湯

大君前湯。細く湯。〇宇都保 藏用 活湯との

湯ニテニ人ムカヒ居テアムスル意カ
 花鳥ニ前湯トアル共意カ

むす湯

〇是ハ野ブスマヲヨメルナラシム
 〇是ハ野ブスマヲヨメルナラシム
 〇是ハ野ブスマヲヨメルナラシム

むさくら

小嶋口号 むさぎに少つぎあうとまこう石山へそ
つうあう

むしけら 虫也

○ 宇都保 けしき とうおほみむしきうと之とも

虫の名

堤才御言 むしきつる姫君 初きあう。いけりきあう
あまむしあつつけき免しつるまふ。

むしあむ

拾遺雜記

○ くらま本の中むしむしとふるまとらめあはるふり

むねうち 胸高ナル意カ

業花 後悔大将 伊むねうちあともあうて。

むしきみ

宇都保 吹上 中 むしきみめう大あまむしあはる。和名

漢父一名 漢 子 荒良 岐美

史本十六 從中歌臣

多岐^{山京下沖}のむらさきみみありけふまのあはれありまはさまをさすは
岩の根かゝちもむらさきも深きさすあはれいさつちあはれむらさき

某むらさき

末
ウラムラサキ
若
濃
落
新
初
黒

史本六 家隆
候むらさきむらさき後承子とみまふかへ天雲の浦風

〇ウラサキ

未
ウラムラサキ
若
濃
落
新
初
黒

五言

むらさき

山京集上
むらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

〇ムカハハトハトウマレカイハノ意ナルハ
シムカハハトハトウマレカイハノ意ナルハ
今生ハカリ君カ心ノ我ニツラリトモ主シ
カハハタラハ我今ナケクムフクニトモ主シ
度ハ我故ニ君カ物ヲ思ヒ給フヘシトモ主シ
タレ故物ヲ思ヒ給フヘキカ我故ナルヘシトモ主シ
〇源 柏木 此世よて菊 思ひうけぬしにむらさきめれハ
冷泉院ノムクイ
ニテ葉ノ生来也

むらさき

加茂 保憲 女 集
あはれむらさき

林 葉ニ

遊京日紀卷末河原
せむらむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

麦の秋風

五月蟬色送麦秋

むし〜むし〜むし 虫掃去テ

古老口 實傳常明寺勤役事一切經虫掃

無定日祿眞寺
中 僧 勤 七 月

むしをせ〜

コシラヘル也。タ、糸ナトニヨウスミテ物ヲツク
ルヲムスト云庵ヲムストノムスフルナリ

花むしい 波部

後拾遺雜四 〇六中の子日ハ志スルヤとて友多チ作也
りる人のとと今ノ書とむし〜むし〜むしを掃〜りれハをめる。

馬内侍

海軍 〇六中の子日ハ志スルヤとて友多チ作也

〇松冊子十 十八 〇七〜〇七〜〇七〜 〇七〜 〇七〜 〇七〜 〇七〜

雅春櫻枝 〇七〜〇七〜〇七〜 〇七〜 〇七〜 〇七〜 〇七〜

むしいすゑ〜 〇七〜〇七〜〇七〜 〇七〜 〇七〜 〇七〜 〇七〜

遮 〇七〜〇七〜〇七〜 〇七〜 〇七〜 〇七〜 〇七〜

朽葉のうき〜のへつ〜み〜入〜り〜 〇

むしを冠

続古萩教 弘長元年六月龜山の仙洞にて如法写

經一傳一十種供養の教花從一位貞子御一
て奉りし法い花也 入道家大政大臣

法い置整つと形し法の花ちりの末まで致あをすれ
○字於保玉表 東文いふく法をいふのも大はるせまひ
てあり形を堂かをふしてゑさめい白か祓のほとく法い云
ふらうのやうにして黒方とちめて洗の多うく形ちも
あつてゑきせまひて○同藏元 主なり法いふのもくき
つて○成通卿家集皇嘉門院に女房共花以
百種花供佛可被奉訪北政所菩提其中式
女房云献結花之日 欲相具和哥一首

可綴作続之

よき法に消し一歩とをさうと繋ぐ法は元とよき
○増鏡 桐のま 左衛門佐親朝ハ法いふもきぬす葉茂む物ありてむきふ
あてふとひぬれく法いふもくすくす梅枝とそれとむすひて付
たる形もあうくくえん形○同 あはれ川 花山院女房ありてむきハ
師徒の 概のむすいうくぬ○新勅雅一高倉院法時友童の紅葉のゆき
をいし甲らち人むすいうくく紅葉をさし 建礼門院
左京大夫
吹風も枝のちきき法代もさいちるぬ紅葉の之茂丁々みき
○続拾雜下藻壁門院からきさせうひく又の年の二月
みの大細云通方むすいうくく花と伝の少あにとく

六の花雪

韓詩外傳云凡草木花多五出雪花独六出。

むれ車

棧草。空車

頼政集 返迎車
 のせてやうかふさへそろそろの移るも之はむれなるまじれ
○字数保 後鳥羽 むれ車にひらひらとてきてききり。○うけ
 ろふ日記 むれ車引つてけくあやうき本ありおろし
 心とおろし中より来る。○字数保 後鳥羽 十三廿一 以ふやうけ
 乙五五せん ことひられをききりあて侍るとひひれハ

其處より去る下人してむれ車うきやうきつみおんと

○松舟子ゆけり月のあるあきまやうき車にあひはる

トアルヲ 異本ニ 月のあるあきまむれ車とひらひらのみ

の里ありく又月夜にむれ車ありきト列案 春曙 本

出七 ○ 此聖人難役ノ空車ヲ持テ器

此斗ヲ得テ喜テ車ニ懸テ寺ノ修造ノ料

棧木ヲ令引ム

拾遺物語 むれ車

むれ車

ム子ヒニケ
ム子ノオキニナ
リサワリ
ム子ツブク

赤深集 ちちうく成てふこおふき多返りゆとむらや
ニやせ初も

むねのけけりくあきききあれいあくら地さるおとる
○源 総角 以うぬまうちせんと胸も印けくおほゆ○同
權 むねのおき所けくまけい○同 野分 むねつふくと
あるこちけりも

六言

むうーつろ
業花 茂縁 殿めつろくきはをく免いふいむうーつろ

ふりーうたやの多けみーかーちあまぬるあほ
里ーと○

むうむさ海に サシムカヒニト云ニ近シ
八雲御抄通後むういさ海ふいそく○

むうーきき
山家集下
みく海の世なききあーかーむ多れはあまふあふ
新六 いふくあてする 存差
むーあるあつあどとあまきうけみたまおろてり列れぬる
又本集下 正三位季能々
草部三むの多れきぬむすいあけくさうつふ装の旅人

○拾葉云蛇ノキヌヌキタルヲ虫ノ垂緒ト云
ナリ。

むすいふらう

空於保^{吹上} ちまむすい袋かちりーろきお陸いそ
あー 秀とつみてらみーろへとつ^{むすい}て○葉元珠
ほほーちちこげさーまけがひもこれむすい袋かち
つろえにけりて○拾遺雜上^{能定} あへほーろろ人の
そとにぬきむすい袋かちーまそにとて○著聞一
画圖麗景殿繪 右右の松のまき、ぬかみんそー

ちま^秘のむすい袋かちーのむとむーちかかろろ
みーろ○繪合模本 此不翻ちまかちろろ

むすいふの神

和名産靈 ムスヒノカミ

拾遺^能 君これむすい袋かちろろ^能 ちまむすい袋かちろろ
心^能 ちまむすい袋かちろろ^能 ちまむすい袋かちろろ
人これむすい袋かちろろ^能 ちまむすい袋かちろろ
○取うてやむすい袋かちろろ^能 ちまむすい袋かちろろ
里ぬ○獲衣ニむすい袋かちろろ^能 ちまむすい袋かちろろ

むねきふね

後拾遺 後三条院

任之の神ハ長と云ふんむねきふねをさしてさきふねハ

○兼元まの志り元 ○後頼口傳同 ○契云院をむねき

船みずへい君ハ舟臣ハ舟みづみ舟みづみ舟みづみ

此七煩形さうゆ信とさうせうとさうしんとさうしん

所之

七言

むくの葉さかき

長明無名抄上見ハむくの葉さかきして鼻あかきむけ

る市平之○兼元 疑 さきむくの葉さかきして四五百人て

下に船さかきさかきさかきさかき

むねきふねの加まり 睦語

ムツカタリ

源 女 女 あはかむむつさかきをらん ○隆信集

煮四何とぬきむねきふね ○源若菜 又人日

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
長長家集 族の男う山政を物るおとほけり此本の下にむつさうさう

むやめてはく

月詣集

小待送集

むらさきこれちり

拾遺貞外下 韻字題諸句妓樓花綻映紅錦樵
徑巖生踏紫塵。下學集可考。

むらめとやせ 波部已出

ムロノカリタ 常花根合 山田のうらにおりあちてはさけやまへむらのとやせ

六帖 一免

子秋下 源兼昌 我門のあつまひのむらめとやせいそくも志免とそくもつ松

十言

むらさきたのきみ

尚齒會記 むらさきをけあふみ三帖をさうて

十六言

紫式部地獄に落し事

室物集四マ子カクハ紫式部カ虚言ヲ以テ源
氏物語ヲ造リタル衆ニヨリテ地獄ニ墮テ昔
患忍カタキ故ニ早ク源氏物語ヲ破リ捨テ
一日經ヲ書テ暗ヘニト人ノ夢ニ見エタリケ
ルトテ哥読共寄合テ一日經書テ供養シケルハ
覺エ給フテニ物ヲ。今物語云或人の夢に
其二体も形も物もけのやう成るを多々あまはし人
々と尋ルれば紫式部こそこの人多く集め
て人の心成さるる所を地獄に成す苦成るる事
いと多しと云ふ源氏物語の石をくしてあはれあはれ

多佛といふ哥成巻毎人々に令傳せりやるる
ことと云ふはいと云ふは色を以てやうにむむ
ありと尋るる事

相蓋にほえてんやまをばうりありあはれ佛と云ふは
とを以ていりる。新勅教紫式部多めとて誦誦經傳
事いし傳るる一冊の藥草喻品を送り傳とて
法力ありてやめしむつしとて紫式部多めあり

隆信集

万代

月詣

権大納言
宗成



